

集団生活になじみ、進んで働く子

— 主として行事単元学習、調理学習に視点をあてた指導 —

野 坂 尚 史

1. はじめに

今日、特に障害児教育に携わる私達教師、及び保護者の反省すべき事項の一つとして、子どもが障害児であるという先入観、偏見から、その子が本来自然に与えられるべき環境を壊してしまっているという問題があげられると考える。子ども自身が、当然すべき仕事であるのに教師や親がその子の仕事を奪ってしまう、また、子どもの甘えをすべて受容して過保護にしてしまう、あるいは知識偏重の教育観から学習のできないことを理由に基本的集団から切り離してしまうなど、無意識のうちにも子どもに与えられるべき自然な環境を壊してしまっていることが意外に多いのではなかろうか。そして、一次的障害の上に、二次的障害をも重ね、二次的障害をも加えられた子を指して、私達は、潜在的にその程度の発達能力しかもちあわせていない子だと思っているふしはないだろうか。

私が、事例研究に取り組んだ一発達遅滞児（以下、E子と記す）も今まで自然な環境を保障されてこなかった生徒である。このE子に対して、私は何も特別な手だてをした訳ではない。ただ、E子が本来与えられるべき自然な環境を取りもどそうと努めただけである。微々たる実践ではあるが一つの問題提起としたい。

2. E子の実態

(表1) E子の就学歴

年齢	就学歴	特記事項
4才	F村立F保育園	水あそびが好きで、よくひとりで遊んだ。
5才	F村立F幼稚園	発達の遅れはあったが集団生活についていく。
6才	F村立F小学校 (1年)	普通学級。急性じん炎で8ヶ月入院。学習に遅れる。
7才	同 校 (2年)	普通学級。産休のため、担任の先生が、年に3回替わる。体調はまだ完全ではなく、午前中2時間まで帰るという日が続く。
8才 9才	同 校 (3.4年)	特殊学級入級。しかし、原学級の先生の理解があり、交流ができた。
10才 11才	同 校 (5.6年)	特殊学級。原学級との交流は、ほとんどなかった。担任の先生によく叱られ、ビクビクしていた。
12才	F村立F中学校 (1年)	特殊学級入級。3年生男子と二人のクラス。原学級との交流はほとんどなし。
13才	同 校 (2年)	特殊学級。一人のクラス。担任の先生によく叱られ、たたかれたりした。
14才	同 校 (3年)	特殊学級。一人のクラス。担任が替わり、先生とのコンタクトがとれ始める。
15才	本校高等部入学 (1年)	(現在に至る。)

(1) E子のプロフィール

昭和45年12月2日生(高等部一年女子)

- ① (出産時の様子) 分娩時、数秒間、窒息状態となる。体重、2,700g。
- ② (乳幼児期の発達の様子) 首のすわり、2ヶ月。発歯、6ヶ月。歩き始め、1才8ヶ月。(言う時期なくして、立ち歩きができるようになった。) 発語、1才6ヶ月。(ことばは多くはなかった。ことばが、しばらくしてとだえ、全く話さなくなった時期があった。) 3才児検診にて発達の遅れを知らされ、児童相談所へ数回通った。
- ③ (家庭環境) 父 39才(土建業) 母 37才(農協職員)、祖母 66才(農業)、弟 12才(F中学校一年)

の5人家族である。両親共働きのため、乳幼児期より、祖母に育てられる。祖母は、厳格な人で、E子への指示、干渉がかなり多かった。母が述懐するには、E子が話し始めた時、祖母が、E子のあいまいなことばを何回も言い直しをさせたようで、そのことがE子のことばが一時とだえたことの大きな原因となっているように考えられる。

④〔就学歴〕 E子の就学歴は、(表1)で示す通りである。まず、注目したいのは、E子が小学校一年生の時に急性じん炎で8ヶ月間入院したことである。学習の遅れはもちろんのこと、集団から切り離された8ヶ月間は、友だちとの関わりをもつ上で、大きな影響を及ぼしたと考える。また、二年生になっても午前中2時間の授業を受けて帰るという日が続き、このあたりでE子は、特別な児童ということになってしまったようである。そして、三年生の時に特殊学級入級。三、四年生の時は原学級の先生の理解で交流がもてたが、五、六年生の時は、担任が替わり、すっかり交流もなくなってしまった。また、不適応行動を起こすたびに大声でしばしば叱られた。このように叱られることで、E子は増々おびえ、不適応行動を起こし、対人関係の上でのゆがみを大きくしていったものと考えられる。そして中学校入学。二年生からは、E子一人のクラスだった。二年生の時は、先生によく叱られ、教室を逃げまわっていたとのことである。三年生になると、E子一人のクラスであったが、担任が替わり、少しずつ精神的な安定が保たれるようになってきた。そして、昭和61年4月、本校高等部に入学し、現在に至っている。

(2) 諸検査、及び観察によるE子の実態

(表2) 諸検査、自然観察によるE子の実態

項目	E子の実態
国語的内容	<ul style="list-style-type: none"> 文章力があり、200字程度の日記が書ける。 小学校2年生程度の漢字の読み書きができる。 文字は、とてもきれいに書く。
数学的内容	<ul style="list-style-type: none"> 時計が分単位で読める。 (2位数)×(2位数)のかけ算ができる。 硬貨、紙幣の種類がわかり、換算ができる。
運動・ 感覚的内容	<ul style="list-style-type: none"> ひも結びがじょうずにできる。 はさみ、かなづちが器用に使える。 自転車に乗ることができる。
身辺自立的 内容	<ul style="list-style-type: none"> 自分の衣服の着脱はできる。 掃除用具の扱い方、手順がわからない。
行動特性	<ul style="list-style-type: none"> 集団の中で落ち着くことが出きず、奇声を発する。 相手の話にきちんと応待することができない。 着席してもキョロキョロし、落ち着かない。 早口で話し、何を言っているのか聞きとりにくい。
WISC-R 知能検査	IQ = 35 (VIQ = 47 PIQ = 42)

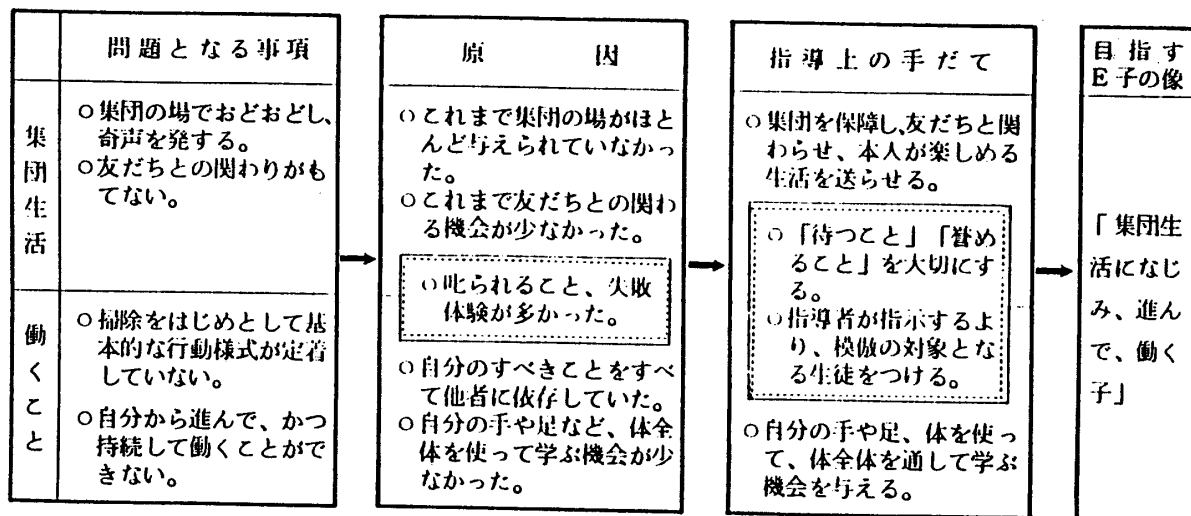
本校に入学した当初のE子の諸検査、及び観察によるE子の実態は(表2)に示す通りである。WISC-Rでは、IQ = 35とかなり低くでているが、国語的内容、数学的内容の検査結果をみれば、知的にはかなり高いものをもっていることがわかる。運動、感覚的内容の検査結果にも問題はない。しかし、身辺自立的内容においては、掃除の仕方がわからず働けない、行動特性では、集団の中では落ちつくことができず奇声を発する、相手の話にきちんと応待することができないなどの問題点があげられ、日常生活における基本的事項、及び集団生活への適応に大きな落ち込みがあることがわかる。

3. テーマ設定の理由(指導仮説)

私は、先に述べたE子の落ち込み部分に着目し、二つの大きな取り組みの柱を設定することにした。一つは、集団生活になじませることであり、もう一つは、見通しをもち、自ら進んで、かつ、持続的に働くことができるようにすることである。このような取り組みの中から、対人関係、働く技能の向

上のみならず、E子に落ちつきや集中力をつけることができるのではないかと考えた。そして、その指導仮説を(図1)のように考えた。

(図1) 指導仮説



(注) [] は両方にかかわる内容を示す。

4. 取り組みの構想

3で述べた指導仮説を実践する場として、高等部の教育課程の上で、次の(表3)で示す場を考えた。

(表3) 高等部の教育課程におけるテーマ実践の場

E子への 取り組み柱	指導単位 など	生活一般	日常生活指導	職業	行事単元学習			
		家庭科(調理)	朝の会	清掃	(木工)	時季的なもの、宿泊学習	校内職業実習	職場実習
集団生活			○			○		○
働くこと		○		○	○		○	○

そして、各指導単位での学習の流れは、次に示す(表4)の通りである。

(表4) 各指導単位における年間の学習の流れ

指導単位		月	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
日常生活指導	朝の会		年間同様の内容をくり返す(表5参照)							
	清掃		"							
職業(木工)			ペン立てづくり	ペン立てづくり	花びん敷づくり なべ敷づくり	花びん敷づくり なべ敷づくり	ハンガーづくり なべ敷づくり	ハンガーづくり	ハンガーづくり ペン立てづくり	ペン立てづくり
	行事単元	時季的なもの 宿泊学習	宿泊学習 (4/16~17) 全校遠足 (4/25)		第2回 宿泊農園 職業実習 (6/2~5)	高等部キャン プ (7/16~17)	大運動会 (9/21)	連合運動会 (10/7) 船上山宿泊 学習 (10/22~23)	学習発表会 (11/23)	
学習	校内職業実習			第1回校内 職業実習 (5/13~21)					第3回校内職業実習 (11/27~12/6)	
	職場実習							職場実習 (10/13 ~18)		

さらに、各指導単位の学習の概要及び、E子への配慮事項は、次の(表5)に示す通りである。

(表5) 各指導単位の学習の概要及びE子への配慮事項

		学 習 の 概 要	E 子 へ の 配 慮 事 項
生 活 一 般	家 庭 科 (調 理)	生徒たちが自分一人になっても、何か作って食べれるよう、生徒達の実態でも作れる簡単なものを題材として扱っている。指導の方針は、次の通りである。①働くことの見通しをもたせてから、仕事をさせる。②仕事の全工程をなるべく、すべての生徒に体験させる。③家庭と連携をとり家でも取り組ませる。	○Y子とペアにし、その模倣ができるようにする。 ○仕事が遅くとも待ち、全工程を経験させるようにする。
日常生活	朝の会	曜日のはりつけて、当番を決める。当番が司会をし、朝の会を進行させる。その内容は、次の通りである。①朝のあいさつ ②健康観察 ③日記の発表 ④係の連絡 ⑤先生の話	○司会にE子があつた時は最初は援助し、除々にその援助を減らしていく。 ○E子に質問し家でのことなど、なるべくたくさん話させる。
指 導	清 掃	E子のクラス1Bは、6人の生徒で、体育館、教室、便所前の廊下の3ヶ所を受けもっている。それぞれの場所を2人ずつのペアで、日替わりでするようにしている。見通しをもって、手際良く仕事をしよう指導している。	○Y子とペアにし、その模倣ができるようにする。 ○働きやすいスペースを与える。
職 業	(木 工)	職業は、5コースに分かれて実施する。木工は、自閉児4名を含む8名より成る。作業工程について一応の流れは知らせるが、すべての手に全工程をさせるのではなく、分業の形態をとっている。指導の方針は、次の通りである。①時間いっぱい作業する。②「できました。」の報告をする。③手を休めない。	○無理なく、できる仕事を準備する。 ○競争意識、目標をもたせる。
行事単元 学 習	時季的なもの 宿泊学習	行事単元学習の中には、時季的行事、宿泊学習をとらえたものがあるが、いずれも、学籍を解いて、他学部、他学級の児童・生徒と関わりがもて、ダイナミックな活動ができるというメリットがある。また、特に宿泊を有するものは一緒に食事をし、風呂に入り、寝るなどという活動を運して、友だちとの関わりをもちやすい。	○活動内容を十分知らせた上で、見通しをもたせる。 ○寸劇等の主役にさせ、その日を楽しみにさせる。
	校内職業 実 習	年4回、実施する。校内職業実習のメリットは、一週間以上もの間、朝来て、帰るまで通して働くことができることにある。働くことの厳しさ、働く態度を体得させるためには、格好のものである。市内の企業から仕事を下請け、この時は、グループを編成し直して取り組むようにしている。	○無理なくできる仕事を準備する。 ○競争意識、目標をもたせる。
	職場実習	高等部全生徒が、それぞれ一週間、市内を中心とした各企業、商店、喫茶店、授産所に実習生として配属され、そこで、一般の人達と同様に働き、生活するものである。一年生にとっては、社会の厳しさを知る初めての試練となる。事業主には、毎日の評価を記してもらい、それが今後の指導の手がかりとなる。	○E子の知り合いの人に、しばらくは休憩時間等一緒に過ごしてもらって環境に慣れさせる。 ○本人が自信をもっている職種ของบริษัทに行かせる。

5. 実践事例

ここでは、紙面の関係で、集団生活になじませるという観点から、行事単元学習の「船上山宿泊学習」

を、また見通しをもって進んで働くという観点から、家庭科（調理）「ハンバーグステーキづくり」を取りあげ、紹介してみたい。


① 行事単元学習「船上山宿泊学習」における取り組み

「船上山宿泊学習」は、毎年10月、船上山少年自然の家に宿泊し、公共の施設の利用の仕方に関心させること、友だちと協力したり、最後までやり抜く態度を養わせること、秋の自然の美しさに触れさせることを主なねらいとして行う高等部の行事単元学習である。その活動の中には、フィールドアスレチック、キャンドルファイヤー（出し物発表をも含む）、船上山登山など、生徒達が好む活動がたくさん盛り込まれている。今年も、日程、決りについての学習をしたり、班ごとに集まって係の決定や出し物練習をしたり、キャンドルファイヤーの全体練習をしたりして、当日に臨んだ。

(1) 事前学習におけるE子への配慮とE子の活動の様子

E子の班では、私が、E子を主役として、劇「らっきょう姫」をしてはどうだろうかとみんなに提案したところ、グループの理解を得ることができた。E子の村がらっきょうの名産地であり、E子もらっきょうが好きであるということから、「しらゆき姫」をもじったこのような劇を思いついたのである。E子は主役であるということから、出し物練習では、毎回張り切って参加した。また、当日には、ほんとうにらっきょうを持参するのりようだった。

(2) 当日におけるE子への配慮とE子の活動の様子（10月22日～23日）

期日・時間	実施事項	全体の活動	E子への配慮事項	E子の活動の様子
10月22日 1:00 ～ 2:30	室内追跡ハイキング	班ごとに少年自然の家の中を歩いて回り、隠されたカードを捜し、そこに書かれている問題をみんなで協力し、解いていった。	Y子をそばにつけ、E子の集団参加がしやすいようにした。問題など指導者が、E子に読ませたり、尋ねたりし、E子を集団の活動の中に導き入れるようにした。	Y子と手をつなぎ集団行動ができた。時々、興奮して高笑いなど、大きな声をだすことがあったが、問題を一生懸命搜したり、考えるなど、集中して取り組むことができた。
2:30 ～ 4:00	フィールドアスレチック	少年自然の家のフィールドアスレチック場を利用して、戸外でフィールドアスレチックに取り組んだ。	Y子をそばにつけ、Y子の後を追って、いろいろな遊具を使用させるようにした。声かけをして、いろいろな遊具を使用してみるよう促した。	Y子について、かなりの遊具をこなした。 移動式ぶらさがりロープに挑戦したが、恐かったようで終ってもしばらく動くことができなかった。その後ひとり、集団から離れて、木の蔭に隠れてしまった。
7:00 ～ 8:30	キャンドルファイヤー（キャンドルサービス、出し物）	全体でキャンドルサービスをする。 班ごとにだし物を披露する。	 のりにのって踊るE子 (写真中央)	火の守という役を与え、点火の際、模倣させて、ゆっくりセリフを言わせる。 指導者が相手役になって、E子のセリフがしやすいような対応をする。 キャンドルサービスでは、自分がセリフを言う番が近くなると「あ、どうしよう。お母さん、どうしよう。」と言ってキョロキョロし始める。しかし、はっきりと、火の守のセリフを言うことができた。 セリフをほとんど覚え、終始笑顔で、楽しそうに劇「らっきょう姫」を演じた。踊りものりにのって披露し、白閉児のU君とスキップしながら、室内を踊ってまわるなどの光景も見られた。

(10月 23日) 9:00 ↓ 11:00	船 上 山 登 山	生徒の実態に合わせて、4つのコースを設け、船上山登山を実施した。	M子をそばにつけて、E子の集団参加をしやすくする。	とても調子良く、グループの前方を歩いた。伏い疲れもあり、教室での学習時に比べ、とても落ちついているようにみえた。
------------------------------------	--------------	----------------------------------	---------------------------	--

(3) 「船上山宿泊学習」を終えて

「船上山宿泊学習」は、E子にとって楽しい行事であったようである。翌日、E子は生活ノートに右のような日記を書いてきた。これまで、宿泊学習、キャンプをはじめとして、いろいろな行事単元学習を経験してきたが、今回の「船上山宿泊学習」が一番、友だちと関わりがもて、生き生きと参加できたようである。それは、一つには、この行事単元学習の内容がE子にとって魅力あるものだったからだと考えられるし、また、もう一つには、E子がこれまでの行事単元学習を中心としたさまざまな指導単位の学習の中で、集団生活の仕方、友だちとの関わり方など少しずつ体得してきたという素地があったことによるとも考えられる。今回、キャンドルサービスの際、E子は、火の守として四番めに「私は奉仕の火をいただきます。」と言うことになっていた。最初の人を終り、二番めの人を終り、E子は自分の番が近づいてくるにつれて落ち着きをなくし、「どうしよう。お母さん、どうしよう。お母さん」とひとり言を言い始めた。しかし、それでも自分の番がくると、体をゆすりながら自分のセリフを言うことができた。

E子の日記より (10月23日)

す	私	が	オ	ド	も	お	き	私	
	は	く	イ	ア	し	も	ま	は	
			っ	ヤ	ス	ろ	し	し	
			ま	て	し	か	ろ	た	今
			た	も	ヤ	チ	っ	か	日
			船	お	室	ッ	た	っ	船
			上	も	内	ク	く	た	上
			山	し	道	や	ゆ	で	山
			に	ろ	路	キ	う	す	は
			行	か	ハ	ヤ	と		か
			き	っ	イ	ン	フ	ど	と
			た	た	キ	ド	イ	く	っ
			い	で	ン	ル	イ	が	て
			で	サ	グ	フル	お	も	て

これは、ほんの一例に過ぎないが、集団生活になじむという点において、大きな成長を見ることのできた行事単元学習だった。

② 家庭科 (調理)

「ハンバーグステーキづくり」における取り組み (10月29日)

学習の概要及び指導方針は(表5)に示した通りである。題材としては、カレーライス、オムライスに次ぐ三つめのものであり、この時間は、「ハンバーグステーキづくり」の二回めにあたる。一回めの調理学習を通して、手順は、だいたい頭に入れており、仕事の流れにも見通しがもてるようになってきた時点での取り組み実践例である。

(1) 当日の学習におけるE子への配慮とE子の活動の様子

学 習 活 動	E子への配慮事項	E子の活動の様子
<p>3. ハンバーグステーキを作る。</p> <p>(1) ボールの中にバーガーヘルパー半袋と水60cを混ぜ、5分間、そのままにする。</p> <p>(2) さらにボールの中にひき肉120gを入れ、しっかりこねる。</p> <p>(3) 形を整え、フライパンに油をひいて焼く。</p> <p>4. 自分のお皿にハンバーグステーキ、ゆでたまご、野菜を盛りつける。</p>	<p>3. なるべく一人で作らせるようにする。Y子とペアにし、Y子を見て仕事を覚えさせるようにする。</p> <p>(1) 水の量は計量カップで計らせる。</p> <p>(2) いい加減で終わってしまうと考えられるので、何回もこねるよう、その都度、指示する。</p> <p>(3) 形、大きさは自由にさせるが、薄くした方が早く焼けるということを知らせる。</p> <p>Y子と交代でフライパンを使う。一人で焼くようにさせる。</p> <p>4. きれいな盛りつけを考えさせる。友達の盛りつけも見せる。</p>	<p>3. わからないところは、Y子を見ながら、自ら考えて、活動した。</p> <p>(1) 目盛りを読み間違え、水の量を間違えたが一人で一生懸命、計ろうとした。</p> <p>(2) 指導者が一度指示すると、後は自分でしっかりこねることができた。</p> <p>(3) Y子は、小さいものをたくさん作ったが、E子は大きいものを作った。</p> <p>Y子をまわて、火加減を調節した。</p> <p>4. 盛りつけは雑であったが、手早く一人でいった。</p>
<p>7. 後片づけをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ガスの元栓の確認をする。 ○食器、フライパン、なべを洗う。 ○流しの生ゴミをとる。 ○室内の掃除をする。 	<p>7. 後片づけは、自主的に仕事を見つけてさせるようにする。何もしない場合は、指導者が指示する。</p>	<p>7. 後片づけは、他児にくらべると取りかかりは遅いが、自分で仕事を見つけて行うことができた。</p>



鍋を洗うE子
(となりはペアのY子)

このあたりにくると、これまでの調理学習の経験から、準備、片づけは、ほとんど指示なくしてできるようになった。

(2) 家庭との連携、家庭での「ハンバーグステーキづくり」を通して

家庭に学校で実施している調理学習の資料を送り、家庭でもハンバーグステーキづくりを、母親に指導してもらうこととした。その指導方針としては、余計な手だてをせず、なるべく本児一人に作らせてもらうようお願いした。早速、E子が調理をする日を決めてもらい、実施してもらったが一回めは、夕方から夜9時半まで時間がかかったとのことであった。それでも、家族みんながE子の作りあげるハンバーグステーキを待っていたとのことである。E子は、家族みんなに「おいしい」と言ってもらうのがうれしくて、家庭では、計5回のハンバーグステーキづくりをした。洋風の食事をあまり好まない祖母がハンバーグステーキを食べ、父親のビールつまみもハンバーグステーキだった。このような家庭の協力があって、E子のハンバーグステーキづくりは、家庭生活に定着するとともに、E子の進んで働こうとする意欲は、これを契機にさらに伸びたようである。

6. 結 果

二つの取り組みの柱からみたE子の変容を期を追って見てみたい。期は、E子の観察期であった4月を第1期とし、落ち着いたなさはあるものの、適応行動がとれ始めた5月～7月を第2期、そして本人の自発性、競争心など見られ始めた9月～11月を第3期として分類した。それぞれの期におけるE子の行動の特徴を(表6)に記してみた。

(表6) 二つの取り組みの柱から見たE子の変容

E子への取り組みの柱	第1期(4月)	第2期(5月～7月)	第3期(9月～11月)
集団生活	<ul style="list-style-type: none"> ○集団の場で奇声をあげ、先生の腕にしがみつく。 ○クラスの中でも友だちとの関わりは、O君とY子に限定されていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○クラスを解いた学習場面では依然として落ちつきがなかった。しかし、その場から逃げることはなくなった。 ○クラスの友だち全員と関わりがもてるようになってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○クラスを解いた学習場面でも落ち着いてきた。 ○しかし、職場実習などで新しい場に入ると、落ち着きがなくなり、奇声をあげたり、逃げまわったりした。
働くこと	<ul style="list-style-type: none"> ○掃除ができず、立って見ているだけだった。 ○調理の時も場を離れ、他人まかせにすることが多かった。 ○15分と座って作業することができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○掃除はY子について、一通りでき始めた。 ○調理もY子を模倣してするようになった。 ○決められた時間中は座って仕事をするようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○掃除が一人でも、見通しをもってでき始めた。 ○調理も一人で、全工程できるようになった。 ○目標や競争心をもって作業ができるようになった。

7. 考察及び今後の課題

(表6)より、E子は期を追って着実に変容していることが分かる。まずは、取り組みの一つの柱である集団適応という観点からE子の変容を考察したい。高等部の行事単元学習、及びクラスの日常生活指導「朝の会」などが、集団活動の場を与えるといった意味で大きな影響を与えたことは言うまでもない。しかし、それと同時に、私は、E子にとってY子の存在の意味も大きかったのではないかと考える。Y子は、E子のすべてを受容してやる隠やかな性格であり、E子はY子との関係を通して、新しい集団に入ることができたのではないだろうか。当初、掃除、調理学習のみならず折に触れて二人をペアにしたのは、E子との集団適応を図る上で効果があったと考える。第3期には、クラス外での集団の場でも落ち着いて活動できるようになっていたが、職場実習という全くの新しい場面では、やはりまだ、さまざまな不適応行動がでた。今後、無理のないステップを設けて、このような新しい場面も経験させ、それを自信に換えていくような取り組みを考えていかなければならないと思う。

次に、もう一つの柱である見通しをもって進んで、かつ、持続的に働くという観点から、E子の変容を考察してみたい。第2期には、友だちを模倣して働くことができるようになり、第3期には、目標や競争心をもって自律的に働くことができるようになった。この間の、伸びは非常に大きいと考える。11月～12月の校内職業実習では、作業量で一番になろうと、休憩時間から作業室へ行き、黙々と仕事をするE子の姿があった。そして、その通り、10日間で一番の作業量をこなしたが、その意志と体力には驚いた。この生徒が、カレーライス作りをすれば、ジャガイモの皮がむけず見ているだけ、清掃をすれば、そのやり方がわからず立っているだけの生徒だったとは信じられないような思いがした。ここまで、E子ができるようになった背景には、第2期より、決められた時間内は、持続して働くというがまん強さを養ってきたこと、また、第3期に、ハンバーグステーキ作りをし、家庭でも実践して自信と喜びを得たこと、また、職場実習を一週間勤めあげ、自信と誇りを得たこと、などが下地にあり、それらのものがあいまってそのような力が発揮されたものと考えられる。

今後さらに、E子に、集団活動の場と、働く場を保障しながら、本人のやる気、意欲を大切にした援助をし、E子の内に眠っている可能性をもっともっと引き出していきたいと考える。